

日本キリスト改革派教会の創立者達が追い求めたもの

M・M

立石牧師から最近紹介された改革派神学の月刊誌「リフォード」の中から「日本基督改革派教会十年史」という表題の1冊(4巻1号)を手に入れました。昭和32年1月1日発行とありますから、1957年、つまり今から54年前の古い文書です。はしがきには、「日本基督改革派教会は創立10周年を迎えたので委員を上げて10年史を編纂することになった。創業最初の10年は、おそらく今後のどの10年よりも最も記念せらるべき10年であろう。(中略)委員らはただ、手元に残っている証拠書類や、脳裏に生きている記憶等をできるだけ正確にまとめて置くことが差しあたった義務だろうと考えて、それぞれ直接関係した方面の事柄を分担して記した。」とあります。

この特集は「緒論前史」「10年史本論」「神戸改革派神学校の沿革」「南長老派教会との関係史」「CRCとの関係」「文化活動」「名簿」から構成されています。以下には、創立記念日が近づいていることでもあり、最初の「前史」を読んだ感想を書きます。

「前史」では、1946年(昭和21年)4月28日~29日に開催された「創立大会」までに、神はどのような人と歴史を用いて日本に改革派教会を起こされたのかを中心に記しています。これを読んで思うことの第一は、改革派教会はそれ以前の日本プロテスタント史と無縁な新興集団ではなく、それどころか、幕末・明治初期以来のプロテスタント教会と深く関わりを有する教派教会である、ということです。創立者の一人であり「東京方面」の執筆者である常葉隆興教師が冒頭に記すとおり、「ローマは1日にて成らざる如く、日本基督改革派教会が設立せられたのも一朝一夕のことではない。米英の長老教会並に改革派教会より派遣せられた宣教師道によって日本に始めて正統的改革派主義キリスト教が伝えられてより種々の経緯をへてやっと出来たのである。」ここでいう宣教師道には、J・C・ヘボン博士夫妻、S・R・ブラウン博士の名前が挙げられています。



ヘボン



ブラウン

第二は、改革派教会の創立者達は、旧・日本基督教会や戦時中に国家により強制的に合同させられた日本基督教団等に属しながらも、この国に歴史的・正統的キリスト教の教会を立ちあげよとの召命を強く覚えて「改革派教会」創立運動を始めた、ということです。運動の始まりは昭和12年(1937年)の「正統的な改革派信仰並に神学」を持っていた教職者などの出版に関する申し合わせであったようです。この会合には、田中剛二、岡田稔、松尾武、角田桂嶽、常葉隆興、川島専助の教職者たちが集まりました。やがて、日本は「教会は外部よりの圧迫と内部における信仰の弱小と相俟って礼拝には宮城遥拝が行われるという暗黒時代」を迎えます。しかし、創立者たちの正統的キリスト教を標ぼうする新教派教会への思いは消えませんでした。



神学生時代の岡田稔



常葉隆興



松尾武

戦争が終わると間もなく、東と西から呼応して日本基督教団を離れ、改革派教会を創立しようとの動きがあちこちで起こされます。具体的にどのような運動が起こされたのかを、東京、神戸、四国、東北、中部の4つのブロックで紹介しています。印象に残った1節は、常葉教師が仙台の渡辺公平教師と連れ立って松島駅から「雪のチラチラする中を3里余歩いて」松尾教師宅を訪れる場面です。「3人で大いに新教会運動について談じ合い新しい教派建設に一致し、新教会は『日本改革派基督教会(仮称)』とし、聖書を神の言として確信し、あらゆる無神論的世界観と生活を破碎せんとするということであった。」

第三は、この熱き思いが創立宣言の「源清く且つ正しき進展を経来れる基督教教理を堅持する教会として果敢なる進軍をなし、健全なる発達を遂ぐる事こそ、祖国と同胞に対する我らの愛の至高の表現なり。」に反映されていることです。この理想的教会はウェストミンスター信仰基準と長老主義による教会政治と善き生活の3つの一致により具現されるべきことを創立宣言は主張しているのです。